

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	今津 孝次郎
最終学歴	学 位	専門分野
京都大学大学院教育学研究科博士課程 (単位取得満期退学)	博士 (教育学、名古屋大学)	教育学, 教育社会学, 学校臨床社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

教育学部が完成年度を無事終えてから2年目に入り、次の段階に向けてさらに独自の教育を具体的に実現していくのが最大の課題である。子どもの命の成長を支援する保育士と幼稚園・小学校の教員にとって求められる資質能力は、「人間力」である。本学のスクールモットーである「真に信頼して事を任せうる人材の育成」を真正面から受け止めて提起する「人間力」とは、表現力や感性を中核にしつつ対人関係力や忍耐力、探究心そして知力などの諸能力や態度を総合した総合的な力を言う。この総合的な「人間力」を培うためのさらなる環境整備に努めることが目標である。

(計画)

- ①「サービス・ラーニング実習」が授業化・単位化され4年目に入る。この新たなカリキュラムが「プレ保育・教育実習」として成功するように、サービス・ラーニング委員会を中心に全面的に取り組んでいきたい。
- ②学生のなかにはわずかではあるが、過少単位や進路の揺らぎ、実習途中取り止めなど、難しい課題を抱えたケースがある。これらについては個別に丁寧な指導を施して、卒業を迎えさせる努力を払う。そしてそれらのケースを通じて、今後とも学生指導上必要な一般的な指導法の工夫点を見つけ出す。
- ③初等教育コースの第2期生1人が小学校教員採用試験に合格した。合格者数はまだ少なく、いっそう着実に成果をあげることが、学生本人にとっても、また教育学部の評価にとっても切実な課題である。すでに教職支援センターとも連携しながら強化対策を積み重ねているが、さらに教育学部全体としてもさらに支援していきたい。
- ④引き続き総合演習を担当することになった。昨年度の文献紹介作業が新鮮であるという学生の感想だったので、さらに継続発展させる方向で、総合演習の教育課題と教育方法を開発する。

○担当科目 (前期・後期)

(前期)

教育原理、生徒・進路指導の理論と方法、教育実習 I 事前事後指導、総合演習 I、
教育実習 I (幼稚園)

(後期)

教職概論 (幼・小)、多文化理解教育、教育社会学、教職実践演習 (幼・小)、総合演習 II、
卒業研究

○教育方法の実践

サービス・ラーニングをさらにレベルアップさせた「学校インターンシップ」を近隣2小学校の

協力を得て実現することができた。地域連携活動でもあるので、「東邦プロジェクトB」として授業化し、小学校教育のベテランである辻正人・非常勤講師に全面的に指導いただいた。この授業化は、大学研究者では決して出来ないことで、実務家教員との協働体制の必要性を痛感した。

○作成した教科書・教材

例年のごとく、教育学部サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック』第6版、2020年3月、を作成し、第5版の「まえがき」、第1・2章を若干修正した。

○自己評価

「学校インターンシップ」（東邦プロジェクトB）を核として、教職支援センター主催の各種講座を開催していくなかで教師の実践や教師の資質・能力のあり方について、実地に再検討を迫られた1年であった。学生たちもさらに積極的に参加するようになり、学生の動機づけを図る環境づくりがどれだけ重要であるか、を再認識させられた。

II 研究活動

○研究課題

昨年から継続するテーマと、本年度の新規テーマが以下の三つである。

- ①継続「社会人のリカレント教育の開発」
- ②継続「教師教育の研究」の一環として、教育言説論の集大成。
- ③継続「多文化理解の教育プログラム開発」として、外国人労働者受け入れ拡大に関する政策分析。

○目標・計画

（目標）

- ①科研「社会人を対象にした教員養成の研究」の4年目延長した最終年度では、3年目に引き続き国内での本格的な調査を実施し、社会人を対象にした教員養成および一般市民の大学入学に関する基本的課題を浮き彫りにした。そのなかで、リカレント教育がなぜ日本で盛んにならないのか、という根本的な疑問を抱くに至った。キャリア変化に関する文化的特徴などを探る必要があると感じ、科研仲間と引き続き総合的研究を引き続き展開する。
- ②20年ぶりに『新版 変動社会の教師教育』（名大出版会）を刊行し、教師教育研究に一区切りをつけたが、関連する研究テーマが浮かび上がった。「チーム学校」や「カリキュラム・マネジメント」、「主体的・対話的で深い学び」などの教育言説に関する検討を行いながら、これまでの関連諸論考も含めて集大成する。
- ③多文化保育の教育プログラム開発」の継続では、学校・園でのフィールドワークが難しくなったので、外国人労働者の受け入れ拡大政策の分析をおこないながら、多文化保育や外国人児童生徒教育の考察に広げていきたい。

（計画）

- ① 研究仲間と、リカレント教育研究の計画を具体的に立案したので、それに沿って、共同研究を進める。
- ②教育言説論集の集大成をおこない、出版に備える。
- ③外国人労働者受け入れ拡大に伴う新たな保育プログラムの具体化をはかりたい。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・今津孝次郎『いじめ・虐待・体罰をその一言で語らないー教育のことばを問い直すー』新曜社、

2019年、全262頁

- ・愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』唯学書房、2019年、全110頁（今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬による共著）
- ・今津孝次郎『新版 変動社会の教師教育』名古屋大学出版会、2017年、全360頁
- ・今津孝次郎監修・著、子どもたちの健やかな育ちを考える養護教諭の会編著『小学校保健室から発信！先生・保護者のためのスマホ読本』学事出版、2017年、全118頁
- ・今津孝次郎『学校と暴力 - いじめ・体罰問題の本質 - 』平凡社新書、2014年、全239頁
- ・今津孝次郎監修、金城学院中学校高等学校編著『先生・保護者のためのケータイ・スマホ・ネット教育のすすめ - 「賢い管理者」となるために』学事出版、2013年、全95頁
- ・今津孝次郎監修・著、金城学院中学校高等学校編著『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』学事出版、2013年、全96頁
- ・今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波新書、2012年、全214頁
- ・今津孝次郎『〈ワードマップ〉学校臨床社会学 - 教育問題の解明と解決のために - 』新曜社、2012年、全249頁

(学術論文)

- ・久野千津・今津孝次郎「単元を見通したカリキュラム・マネジメント - 算数科を中心に - 』『東邦学誌』第48巻第2号、2019年12月
- ・久野千津・今津孝次郎「新学習指導要領とカリキュラム・マネジメント」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月
- ・今津孝次郎『「チーム学校」の光と影』『中部教育学会紀要』第18号、2018年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズ - 大学への『社会人入学』に関する質問紙調査を通じて - 』『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「大学への社会人入学に関するニーズ - 一般市民への質問紙調査の結果から - 』『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No.28、2018年3月
- ・川崎勝彦・今津孝次郎「秋の虫取りによる『保育内容（環境）』学習の試み - 平和公園のフィールドワークから - 』『東邦学誌』第46巻第1号、2017年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「大学における現職教員の学び直しに関するニーズ - 2015年度予備調査の結果から - 』『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No.26、2017年3月
- ・今津孝次郎「教員養成における『大学中心』と『学校現場中心』 - 『サービス・ラーニング』と『学校インターンシップ』 - 』『東邦学誌』第45巻第1号、2016年6月
- ・今津孝次郎「改訂 情報メディア社会の生徒指導」『教員免許更新講習・印刷教材集』（ラジオ）放送大学、2015年7月
- ・今津孝次郎「改訂 生徒指導のサポートネットワーク」『教員免許更新講習・印刷教材集』（ラジオ）放送大学、2015年7月

(学会発表)

- ・田川隆博・加藤潤・今津孝次郎・白山真澄・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズ - 大学への「社会人入学」に関する質問紙調査を通じて - 』日本教育社会学会第69回大会、一橋

大学、2017年10月21日

- ・今津孝次郎・田川隆博、加藤潤、白山真澄、長谷川哲也、林雅代「大学への社会人入学に関するニーズ—一般市民への質問紙調査の結果から—」中部教育学会第66回大会、福井医療大学、2017年6月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博「大学への社会人入学の促進要因と抑制要因」日本教育社会学会第68回大会、名古屋大学、2016年9月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博・長谷川哲也「大学における現職教員の学び直しに関するニーズ—予備調査の結果から—」（中部教育学会第65回大会、中部大学、2016年6月25日）
- ・今津孝次郎「私立大学は教員養成制度の大改革にどう立ち向かうのか」全私教協「2015年度教職課程運営に関する研究交流集会」シンポジウム「今後の教員養成政策と私立大学教職課程の課題」（金城学院大学、2015年11月7日）
- ・長谷川哲也・菅野文彦・今津孝次郎「教師を目指す学生による『学校現場体験』の再検討—静岡大学と愛知東邦大学の実践を事例として—」（日本教師教育学会第25回大会、信州大学、2015年9月20日）
- ・今津孝次郎「教員養成における『経験学習』法としての『サービス・ラーニング』—愛知東邦大学教育学部の試み—」教員養成における新方法開発シンポジウム、静岡大学教育学部、2015年3月26日
- ・今津孝次郎「体罰問題の教育言説論的考察」日本教育社会学会第66回大会、松山大学、2014年9月14日）
- ・今津孝次郎「移民時代の異文化理解と自文化認識」名古屋多文化共生研究会シンポジウム「外国につながる子どもたちのために今何ができるか」、名古屋市立大学、2014年7月26日
- ・今津孝次郎「『勉強』と『学び』」シンポジウム：学びに向かう子どもを育てる」日本教育会愛知県支部「第34回教育問題研究会」、愛知県女性総合センター、2014年7月24日
- ・今津孝次郎「名古屋大学のEdDプログラムの成果と課題—PhDとの相違を中心に」愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学シンポジウム、愛知教育大学、2014年3月9日
- ・今津孝次郎「教師の『資質・能力』概念の再検討—六層構成の視点から—」日本教育社会学会第64回大会、同志社大学、2012年10月27日
- ・今津孝次郎「外国人児童生徒教育の実践的研究課題—学校臨床社会学の立場から—」日本教育学会第71回大会・公開シンポジウム「グローバル化時代の教育と職業—移民の青少年におけるキャリア形成をめぐる—」、名古屋大学、2012年8月25日
- ・今津孝次郎「臨床社会学の『介入参画』法」関西社会学会第63回大会、皇學館大学、2012年5月27日

(特許)

(その他)

<事典項目>

- ・今津孝次郎「教職専門性の変容」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018年
- ・今津孝次郎「ライスステージの変化とライフコース」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018年

<評論>

- ・今津孝次郎「古典に親しむ楽しさ」『邦苑』NO.40、愛知東邦大学後援会、2019年3月
- ・今津孝次郎「高大接続を目指す『キャリア教育』—『ボランティア』から『サービス・ラーニン

グ』そして『インターンシップ』へ」名古屋大学高大接続研究センター「レクチャーシリーズ」、2018年1月

- ・今津孝次郎「<巻頭言>教師教育にとって『大学』と『学校現場』との関係を問い直す」『教育展望』教育調査研究所、2017年10月号
- ・今津孝次郎「私の教育学部50年—大学の春夏秋冬—」『京都大学教育学部同窓会会報』第33号、2017年3月
- ・今津孝次郎「大学の社会人獲得—土日授業・学費軽減を—」『日本経済新聞』、2016年11月7日付
- ・今津孝次郎「多文化地域社会の保育を考える」「フレンズ・TOHO」会報『みどりの風』第40号、2016年2月24日
- ・今津孝次郎「学校現場ネットワークと教師の『同僚性』」『教職大学院ニュースレター』79号、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻、2015年12月23日
- ・今津孝次郎「『いじめ防止対策推進法』をどう受け止めるか」『月刊高校教育』2014年5月号、学事出版
- ・今津孝次郎「いじめ認識の弱点を乗り越える—『事件対処型』発想と『教育対応型』発想—」『教育と医学』2013年11月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「学校の体罰防止—『懲戒』のガイドライン作れ—」『朝日新聞』〔私の視点〕、2013年2月23日
- ・今津孝次郎「<巻頭随筆>いじめ問題の基礎知識」『教育と医学』2013年2月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「ケータイの賢い管理責任者となる—金城学院中高校PTA研修会の試み—」『月刊高校教育』2012年8月号、学事出版
- ・今津孝次郎「<巻頭随筆>子どもが地域と出会う場を創り出す学校」『教育と医学』2012年2月号、慶應義塾大学出版会

<書評>

- ・今津孝次郎「志水宏吉・高田一宏編著『マインド・ザ・ギャップ—現代日本の学力格差とその克服—』大阪大学出版会、2016年4月、『教育社会学研究』第100集、2017年7月
- ・今津孝次郎「自著『学校と暴力』の書評に答えて」（書評リプライ）、『教育社会学研究』第98集、2016年6月
- ・今津孝次郎〔図書紹介〕「アンディ・ハーグリーブス（木村優・篠原岳司・秋田喜代美 監訳）『知識社会の学校と教師—不安定な時代における教育—』金子書房、2015年」、『教育学研究』第82巻第3号、2015年9月
- ・今津孝次郎「酒井朗『教育臨床社会学の可能性』勁草書房、2014年」、『教育展望』2014年11月号
- ・今津孝次郎「自著『教師が育つ条件』の書評に答えて（書評リプライ）」、『教育社会学研究』第93集、2013年12月
- ・今津孝次郎「副田義也『教育基本法の社会史』有信堂高文社、2012年」、『社会学評論』64巻1号、2013年6月
- ・今津孝次郎「人間関係の解明に向けた生涯発達社会的視点」【書評シンポジウム】高橋恵子『人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達—』東京大学出版会、2010年、『児童心理学の進歩』2013年版、金子書房、2013年6月

- ・今津孝次郎「志水宏吉〔編〕『格差をこえる学校づくりー関西の挑戦ー』大阪大学出版会、2011年」、『教育社会学研究』第90集、2012年6月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成31～令和3（2019～2021）年度 科学研究費助成金（基盤研究（C））研究課題名：「リカレント教育の抑制要因に関する文化的・制度的分析」研究代表者：加藤潤（研究分担者：今津孝次郎・田川隆博・他3名）交付総額：4,300,000円
- ・平成26～29（2014～2017）年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究課題名：「社会人を対象にした教員養成プログラムの開発」研究代表者：今津孝次郎（研究分担者：長谷川哲也・他4名）交付総額：4,550,000円（3年間だったが、課題が残ったので、平成29（2017）年度まで1年間延長した）

○所属学会

日本教育学会、日本教育社会学会、日本教師教育学会、中部教育学会、日本社会学会、関西社会学会

○自己評価

- ①これまで7年間の研究仲間との共同研究成果が認められ科研申請テーマ「リカレント教育の抑制要因に関する文化的・制度的分析」が採択された（研究代表者は加藤潤に交代）。さっそく今回は広く勤労者を対象に東海地方に加えて対照地域として新潟を加え、社会人の学びに関する総合的なアンケート調査を実施、1600を超える回答を得て、集計・分析作業に取りかかったところである。詳細な属性も回答してもらったので、近年珍しい実証調査研究になるはずである。
- ②愛知県いじめ問題調査委員会の作業と並行しながら、いじめ問題を中心にして、さらに虐待・体罰問題も含めて、これまで20年以上にわたって書き続けてきた諸論考を総合し、「教育言説」の観点から大幅な加筆修正を施し、『いじめ・虐待・体罰をその一言で語らないー教育のことばを問い直すー』（新曜社）を刊行することができた。
- ③多文化保育のフィールドワークについて保育園の受入れが難しくなって実施ができなくなったので、外国人労働者拡大政策に関するメディア資料を多用して「多文化理解教育」で集中して講義をおこなった。学生たちはアルバイト先などでの外国人との交流が多いだけに、現代日本の実質的「移民政策」の動向について興味関心を示したことが毎回提出の小レポートに表されている。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

教職支援センター長として、センター業務をさらに充実させることが役割である。

（計画）

- ①教職支援センター主催で教採合格強化講座を引き続きおこないながら、「東邦プロジェクト」授業を開講し、学校インターンシップの取り組みを目指す。
- ②文科省による教職課程「実地視察」の可能性が高いので、その準備を進める。
- ③他大学の教職センターとの交流をはかる。

○学内委員等

幼小教職課程委員会委員、保育士養成課程委員会委員、教職支援センター運営委員長・センター

長、

○自己評価

- ①教職支援センター主催で 年間を通じて全7講座を新たに開催した。2年生から4年生まで各学年で必要とされる教採対策講座と教職探究講座である。さらに「学校インターンシップ」として2年生担当の授業「東邦プロジェクトB」を近隣2小学校の協力を得て試行し、今後に向けたモデル授業を開発することができた。学生に大好評であった。
- ②文科省による教職課程「実地視察」が近づいている。年間を通じてそのつど準備を重ねてきているが、「受け入れのシミュレーション」を作成するに至った。実際に文科省から連絡があったら、議論を重ねてきて知識の豊富な教職員による小委員会を構成することが要請される。
- ③本年度は十分に展開できなかったが、東海・北陸私教懇の役目を次期メンバーに引き継ぎ、他大学の教職センターとの交流をいっそうはかるための基礎固めをおこなった。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

サービス・ラーニングを通じて学校・園などへの訪問を進めるなかで、名東区内のいくつかの小学校、幼稚園、保育所、児童福祉施設などとの連携がすっかり定着するとともに、名東区役所や名東文化小劇場、名東図書館との連携も具体的なプロジェクトを介して生まれた。そうした地域連携をさらに深めていく。

(計画)

- ①サービス・ラーニングの成果も報告しながら、学校・園など諸機関の行事の支援を進める。
- ②名東区子育て支援ネットワーク協議会の正式メンバー（大学機関としては初）であり、独自の公開コミュニティカレッジ講座も開設しているので、担当教員と共に地域の社会貢献をはかる。
- ③名東文化小劇場から依頼された「あつまれ! KIDS たいけん」を引き続き開催するとともに、名東図書館の「子ども広場」をさらに継続していく。

○学会活動等

科研の研究期間が終了したので特に活動は無かったが、次の科研がスタートしたので、次年度は学会発表がいくつか予定されている。

○地域連携・社会貢献等

- ・愛知県いじめ問題調査委員会で委員長役を務め、私立中学校でのいじめ事案に関する調査報告書を作成した。
- ・松本大学外部評価委員会委員長を務め、昨年度に引き続き外部評価作業をおこなった。

○自己評価

- ①サービス・ラーニング実習はスタートしてから4年を経過し、すっかり定着した。名東区内の小学校や幼稚園、保育所、児童館、図書館、名東文化小劇場、子育て支援ネットワーク協議会などとの連携も強固なものになっている。ただ、学生にとっては、各施設・機関での実習を通じて経験した内容の振り返りが十分にできていない。その点の指導を個々の学生に即してどうするか、が今後の課題である。サービス・ラーニング実習は、「認知学習」に対して最近世界で関心が高まっている「非認知学習」の側面が極めて大きいと言える。つまり、**㉑**対人関係能力（ソーシャル・スキル、子ども・親・同僚などとの関係づくり）、**㉒**広く興味・関心を抱き継続的に探究する態度、**㉓**周囲に自分を伝える総合的な自己表現能力、**㉔**困難を克服しよう

とする姿勢・挑戦力、といった諸側面である。こうした諸側面が現代の教師に求められているだけに、サービス・ラーニング実習は教員養成にとって重要となっているのである。

- ②愛知県下中学校でのいじめ事案を2件調査するなかで浮かび上がったのは、「初期対応」を「組織的」におこなうというよく知られた取り組みを円滑に運ぶための基礎条件である。それは学校組織の根本的な在りように関わる。教員同士が日常的にコミュニケーションをおこなうこと、校長が明確な「反いじめ」方針を掲げ、そのための子ども理解と客観的な事実把握と解決に向けた組織運営にリーダーシップを発揮していくこと、である。いじめ問題をどうするか、という背後に、学校組織経営というより大きな課題が存在していることが新たな知見として得られた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

2020年3月末で任期が終わって退職し、4月1日から星槎大学大学院教育学研究科(横浜市中区)に新設される博士後期課程の担当へと異動する。この2年間、文科省への設置申請書作成を手伝ってきた。そのなかで教育系博士課程の在り方について、さまざまな角度から調べ検討できたことは思いがけない収穫であった。伝統的なPhDコースと名古屋大学で2005年に始めた全国初のEdDコースとの比較は、単に教育研究のアカデミックなスタイルの差異に止まらず、国の教育系大学院制度の政策とも深く関連していることが分かった。

VI 総括

1. 研究活動では、教育言説論の集大成として『いじめ・虐待・体罰をその一言で語らない—教育のことばを問い直す—』（新曜社）を9冊目の単著として出版したのが最大の収穫である。教育の社会問題はマスメディアでも良く取り上げられて他方面から論じられるが、問題解明も問題解決もいつまで経っても掘り下げられないのは、ことばの使い方が表面的で乱雑であり、問題の立て方や論じ方自体に問題があるからである、と論じた。
2. サービス・ラーニング実習の実践的取組みが『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』（唯学書房）としてサービス・ラーニング委員会の同僚との共著としてまとまったことも意義深い。新たな用語「サービス・ラーニング」が全国に広がる契機となるにちがいない。
3. 特別の教育活動として、2年生の個別指導を年間通じておこなうという思ってもみないことを経験した。2019年度末でGPAが3.7に達した優秀な女子学生が総合演習ゼミ生にいる。彼女は2年生になったときから、小学校教師を目指しながらも、同時に大学院でさらに研究したいという強い願望を抱いていた。そこで、大学院進学をすればいかなる準備が必要か、相談に乗る形で課題を出して、本人がそれに解答するというやり取りを、ほぼ毎週個別指導してきた。「幼稚園と小学校における『非認知能力』と『認知能力』の発達」という研究テーマが整ってきた段階で、愛知県立大学大学院人間発達学研究科へ案内し、研究科長と面会してテーマについて相談するという機会もつくれた。2年後の卒業研究の大まかな章構成についても、早くも概要が出来上がるという驚くべき意欲と能力を発揮している。海外にも関心が強く、すでにイギリスのウィンブルドンで2週間の語学研修をおこない、カナダのバンクーバーで1週間の語学研修と2週間の幼稚園インターンシップを経験した。こうした海外留学についても事前・事後の助言をおこなった。本教育学部の学生は優秀な者とそうでない者とが両極分解している実態があるが、最近では優秀な学生層が少しずつ増えている傾向が見られる。そうした上位層の学生の能力をいっそう伸ばす環境づくりにも力を注ぐ必要がある。

以 上